

小学校英語カリキュラムの効果に関する研究 －A小学校の卒業生への第2次追跡調査の結果をもとに－

金 瑠淑

The Effect of Primary School English Curriculum: Based on the 2nd Follow-up Survey to Graduates of “A” Primary School

KIM, Hyun-sook

要 旨

本研究の目的は、小学校英語カリキュラムのあり方への示唆を得るために、カリキュラムの長期的な影響を実証的に明らかにすることである。本稿では、A小学校卒業後6年から10年が経っている卒業生への追跡調査の結果を、英語学習および異文化学習の二つの側面から分析する。

本研究では、小学校の時に経験したカリキュラムの特徴が、高校、大学までの英語学習および異文化意識の両側面にどう影響を与えているかを検討していく。本研究では、事例校として、1996年から4回の研究開発学校の指定を受けて英会話を実施していたA小学校を選択し、卒業後6年から10年が経っている卒業生への追跡調査によりそれを検証した。調査の対象者は、A中学校に在籍していた2002年3月から2006年3月までの卒業生の中で、A小学校出身であった466名である。調査は予備調査として卒業生との座談会を行った後に、本調査を2009年2月に郵送法による質問紙調査で実施し、90名からの回答を得た(回答率19.4%)。

分析の結果、小学校英語カリキュラムは、異文化間コミュニケーション能力の基礎になる非言語的な部分へ一定の影響を与えていることと、言語的な部分では「聞き取り」に効果がみられ、適切な時期の文字学習の導入が「会話」と関わる基礎的部分に影響を与えていることが明らかになった。ただ、これらの評価は女子の方が積極的に評価している傾向がみられた。特に、ゲームや遊び中心の単純な活動や内容に対する男女差は、小学校英語カリキュラムの教育内容と活動の精選を考える際に、考慮すべき部分であろう。また、「外国人との直接交流」「会話する」などといった体験は、最も長期的に小学校英語カリキュラムの良い影響として認識されていた。「中身と相手があるコミュニケーション体験」を中心とする異文化学習が、中学校英語との連続性を確保する要因になると考えられる。

1. 問題の所在

本研究の目的は、小学校英語カリキュラムのあり方への示唆を得るために、カリキュラムの長期的な影響を実証的に明らかにすることである。本稿では、A小学校卒業後6年から10年が経っている卒業生への追跡調査の結果を、英語学習および異文化学習の二つの側面から分析する。

日本では2002年度から小学校の「総合的な学習の時間」において国際理解の一環として外国語会話が実施され、2008年3月に告示された「小学校学習指導要領」では、小学校5・6年で年間35単位時間(週1コマ相当)、必修として「外国語活動」が実施されることになった。導入当初「総合的な学習の時間」として実施された外国語会話の基本的な考え方は、2008年の新学習指導要領において継承されていて、「外国語活動」の目標の中に「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解」と「コミュニケーション能力の素地」として残っている。日本では、依然として小学校英語の早期化、教科化をめぐる山積する課題を抱えながら、小学校英語カリキュラムの改善案を模索

しているところである。

それでは、導入初期の国際理解の一環としての小学校英語カリキュラムは、どのような効果をあげているのだろうか。文部科学省指定の研究開発学校は1990年代後半から全国的に増えているが、その時期に小学校英語カリキュラムを受けた子どもたちは、すでに社会人になっている。彼らの小学校での英語学習経験は、はたしてその後の英語学習にどのような影響を与えていたのか、小学校英語カリキュラムをどう評価しているか、これらを検討することで、学習者が成人するまでの小学校英語カリキュラムの長期的な影響を捉えることができるだろう。

これまで小学校英語カリキュラムの効果研究は、主に言語習得の面から実際テストを行った調査からなる研究と、生徒たちの情意的面を調べた研究に分かれる。前者の代表的な研究としては、松川(1997)、白畑(2007)などがあり、後者の研究としては、金(2004, 2009)などがある。例えば、導入初期の先駆的な効果研究である松川の研究では、小学校時代の英語学習経験の有無によるグループを対象に、中学校英語に対する意識調査とス

ピーキング・テストを行い、小学校で2年間英語学習を経験したグループが反応の速さ、内容の適切さの面で優れており、英語力やコミュニケーションに対する積極的な態度が育っていることを明らかにした。また、白畑は小学校時代の英語学習経験の有無によるグループで高校生の英語能力の差を調べ、小学校時代の英語学習の経験が、高等学校の英語能力にはそれほど影響を与えていないことを明らかにした。一方、継続的に小学校英語カリキュラムの効果研究を展開している金は、異なる二つのカリキュラムタイプの比較(金, 2004)、一つの小学校の英語カリキュラムの変容に伴う影響の分析(金, 2009)を通して、幅広く小学校英語カリキュラムの特徴による影響分析を試みた。その結果、異文化学習と実践的なコミュニケーションの経験の間には相互関係があることを明らかにしてきた。特に、後者の研究では、文字学習の有効性や異文化学習と英語学習の関連性について明らかにしている(65頁)が、中学校での異文化学習の連続性の確保は、未だに課題である。これらの研究は、小学校英語カリキュラムの影響を多角的な視点からみていく必要があることを示している。

本研究では、小学校英語カリキュラムの長期的な影響に注目する。なぜなら、これまで小学校英語カリキュラムの効果を長期的に捉えた研究はほとんどないからである。筆者は、小学校英語導入初期の効果を明らかにするために、異文化学習と英語学習による相乗的な効果に注目し、卒業生が小学校の時に経験したカリキュラムの特徴が、高校、大学までの英語学習および異文化意識の両側面にどう影響を与えているかを明らかにしたい。

本研究では、「英語学習」と「異文化学習」の影響が実証できる事例校として、1996年から2008年まで文部科学省から4回の研究開発学校の指定⁽¹⁾を受けて、英会話を実施しているA小学校を選択し、卒業後6年から10年が経っている卒業生への追跡調査によりそれを検証していく。筆者は、2001年と2004年に初期のA小学校カリキュラムを経験した卒業生に質問紙調査を行ったことがある。今回は当時調査対象者だった卒業生に第2次追跡調査を実施した。A小学校のカリキュラムは、異文化理解力を育成することを目的として出発し、文字学習を導入し、小中連携の英語科という形で変遷している。これらの異なったカリキュラムのあり方は、卒業生に何らかの影響を及ぼしているに違いない。

本研究では、次の二つの課題を設定する。①小学校英語カリキュラムにおける諸活動が英語学習にどのような影響を与えるのか、②外国人との直接交流を特徴とするA小学校の異文化学習は、卒業生にどのような影響を与えるのか。これらの課題を解明するため、以下では主に文字学習と異文化学習の影響がみられた異文化意識、外国語学習への態度、小学校英語に対する回顧的な評価を尋ねた諸項目を中心に、質問紙調査の結果を分

析する。

2. 調査の概要と分析対象者が受けたカリキュラムの特徴

本調査の対象は、C県のA中学校の卒業生である。具体的な調査対象者は、2002年3月から2006年3月までの卒業生の中で、A小学校出身であった466名である。筆者が調査対象校としてA中学校を選んだ理由は、異なるカリキュラムを経験したA小学校の卒業生が在籍しているからである。

調査は次の手順で実施した。まず、質問紙作成のための予備調査として座談会を実施した(2008年12月21日)。座談会の参加者は、A中学校卒業生8名、中学校英語教員、A小学校の教員の計10人で、2時間にわたってA小学校英語学習について意見を交換した。質問紙はこの座談会の内容を踏まえた上で作成した。主に「異文化への関心と態度」、「英語学習への意識と意見」、「中学校英語学習への意識」、「小学校英語学習の回顧的評価」、「小学校英語学習への意識」、「異文化間コミュニケーション能力」の6事項で構成した。それぞれの項目に対して4件法による回答を求めた。次に、本調査は2009年2月27日から3月31日にかけて郵送法による質問紙調査で実施した。その結果、90名からの回答を得た(回答率19.3%)。

ここでA小学校の地域的な特性とカリキュラムについて述べておきたい。A小学校は古くからの門前町として栄えてきた地域を校区とする学校である。商店街の子どもが多く、一歩外に出ると多くの外国人に出会うことができる機会をもっている。A小学校のカリキュラムの特徴は、第1回目は国際理解を重視した「英語を通しての国際理解教育タイプ」であり、第2回目は部分的文字学習を導入し教科化を目指した「国際理解の基礎としての英語学習タイプ」で異なる。第3回目は、英語学習タイプがさらに進化し、本格的な文字学習と小中連携を重視しながら「小中連携を重視した教科化」を目指している。〈表1〉は、A小学校卒業生が経験した当時のカリキュラムの特徴を題材別に示したものである。

ここでA小学校の英語カリキュラムの中で、カリキュラムが変わっても一貫して重視している国際交流活動の特徴についてふれておきたい。年に2~3回行われる国際理解活動は、「英語の授業で身につけた英語を生かしてコミュニケーションを図る活動」としてカリキュラムの中に位置づけられている。1年生から4年生まではゲストを招き交流活動を行うが、ゲストを集めるに当たっては、教員が街頭に出て行って、外国人に声をかけてその場で招く方式を取っている。事前に国を選んだりすることはできない。また、5・6年生の時に、校外で外国人と直接英会話を試みる〇〇活動も特徴的である。この活動は校外で外国人に出会える確率が高い地域の特性があつてこそ可能な活動である。そこで子どもたちは「本物の外国人とのコミュニ

表1：A小学校英会話カリキュラムの特徴

	第1回目の研究開発 (1996～1998)	第2回目の研究開発 (2000～2002)	第3回目の研究開発 (2003～2005)
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・身近に出会う外国人と簡単なコミュニケーションを進んでとることができる。 ・人と人との出会いを大切にすることができる。 		
時数	週1時間(20分間授業を週2回)	週2.5時間(20分間授業を週5回)	
指導体制	ALT, HT, JTE, ゲストのTT (ALTとHTとのTT, ALTとHTとJTEとのTT)	ALT, HT, JTE, ゲストのTT (ALTとHTとのTTが週3回, JTEとHTとのTTが週2回)	
英語学習	<ul style="list-style-type: none"> ・低学年：ゲームやリズム遊び中心 ・中学年：簡単な英会話と場面設定を組み合わせる ・高学年：実際に外国人とコミュニケーションを図ることができる会話や場面を設定 	<ul style="list-style-type: none"> ・低学年：ことばで遊ぶ。「聞く・話す」中心(1～3年生) ・中学年：会話で遊ぶ。文字に触れる(4年生) ・高学年：会話を楽しむ, 文字に慣れる ・全学年を通して, 英語で歌う・踊る, 英語を聞く, 英語で演じる 	
文字学習	なし	部分的文字指導開始 <ul style="list-style-type: none"> ・4年生：身近な単語に触れる ・5年生：身近で必要感のある単語を読んだり書いたりする ・6年生：身近で必要感のある単語やあいさつの文を読んだり書いたりする 	本格的な文字指導開始 <ul style="list-style-type: none"> ・4年生：大文字・小文字と音を結びつける ・5年生：音と結びつけてアルファベットを書く, 単語を書き写す ・6年生：よく使う単語を書く, 簡単な文を書く, 簡単な自己紹介文を書く
国際交流活動	<ul style="list-style-type: none"> ・1～4年：交流活動(学校に外国人ゲストを招待して触れ合う活動) ・5、6年：〇〇活動(校外で外国人と直接英会話をさせる活動) ・ハッピータイム：学校に突然訪れる外国人と一緒に楽しむ活動 ・授業で身につけた英語を使って, コミュニケーションを図ることが中心 		
小中連携			<ul style="list-style-type: none"> ・小中連携のカリキュラムの工夫 ・中学校でも〇〇活動 ・小中教員の交流が活発

注) ALT (Assistant Language Teacher:外国人指導助手), HT (Homeroom Teacher:学級担任), JTE (Japanese Teacher of English:日本人英語教師), TT (Team-Teaching)。
99年度は第1回目と同様の実践を行った。表はA小学校の研究開発実施報告書に基づいて、執筆者が作成。

表2：分析対象者の特性(%)

		全体	国際理解	英語科	男	女
卒業年度 (調査当時の 学年)	02年(大4)	24 (26.7)	47	43	14	10
	03年(大3)	23 (25.6)			7	16
	04年(大2)	13 (14.4)	6		7	
	05年(大1)	18 (20.0)	6		12	
	06年(高3)	12 (13.3)	5		7	
性別	男子	38 (42.2)	21 (44.7)	17 (39.5)		
	女子	52 (57.8)	26 (55.3)	26 (60.5)		
身分	学生	78 (86.7)	36 (76.6)	42 (97.7)	35 (92.1)	43 (82.7)
	社会人	10 (11.1)	9 (19.1)	1 (2.3)	2 (5.3)	8 (15.4)
	その他	2 (2.2)	2 (4.3)	0	1 (2.6)	1 (1.9)
英語の成績 (中学)	0～60点	15 (16.7)	10 (21.3)	5 (11.6)	6 (15.8)	9 (17.3)
	61～80点	28 (31.1)	14 (29.8)	14 (32.6)	15 (39.5)	13 (25.0)
	81～100点	46 (51.1)	22 (46.8)	24 (55.8)	17 (44.7)	29 (55.8)
	不明	1 (1.1)	1 (2.1)	0	0	1 (1.9)
英語の成績 (高校)	0～60点	24 (26.7)	12 (25.5)	12 (27.9)	11 (28.9)	13 (25.0)
	61～80点	41 (45.6)	25 (53.2)	16 (37.2)	18 (47.4)	23 (44.2)
	81～100点	23 (25.6)	8 (17.0)	15 (34.9)	8 (21.1)	15 (28.8)
	不明	2 (2.2)	2 (4.3)	0	1 (2.6)	1 (1.9)
校外学習(英語)経験率(小)		33 (36.7)	16 (34.1)	17 (39.5)	10 (26.4)	23 (44.2)
校外学習(英語)経験率(中)		29 (32.2)	11 (23.4)	18 (41.9)	16 (42.1)	13 (25.0)
海外旅行の経験率		64 (71.1)	35 (74.5)	29 (67.4)	28 (73.7)	36 (69.2)

注) 英語の成績は、3年間のテストの平均点である。

表3：分析対象者が経験した英語学習の特徴と年数

	卒業 年度	小学校		中学校	授業時数 (小)
		第1回	第2回	第3回	
国際理解	2002	3年			105時間
	2003	4年			140時間
英語科	2004	4年	1年	1年	228時間
	2005	4年	2年	2年	316時間
	2006	3年	3年	3年	369時間

注) 授業時数：1 授業時間は40分

ケーション」を体験する。子どもたちが外国人に声をかけたとなん、忙しいと断られる場合もある。しかし、対応してくれる外国人の多くは状況を把握し、ゆっくりと話しながら対応している。事前の打ち合わせがあるわけではないので、習っていない表現を耳にするが、身振り手振りを混ぜながら、何とか外国人とのコミュニケーションを取る経験をする。

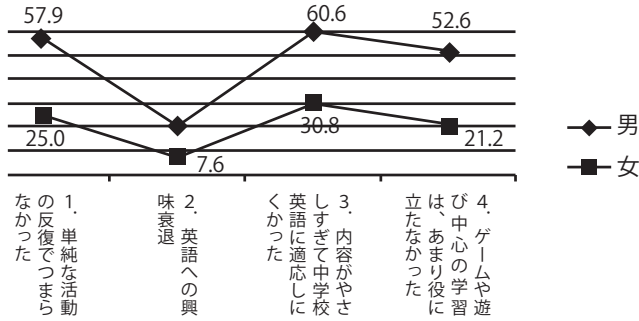
これらの活動は一見、外国人ゲストを招待して触れ合い、ALTと親しくなるといった交流活動と類似しているが、その根底には「外国人との本物のコミュニケーション体験」が存在する。A小学校は特に多文化を意識しているわけではないが、対人コミュニケーションの基礎として「Big Voice, Eye Contact, Open Mind」といった非言語的な要素を重視し、カリキュラムの中に目標化しているので、子どもたちは外国人とのコミュニケーションを取るとき基礎になる力を身につける機会が得られる。

次に、分析対象者の特性は<表2>に示す通りである。英語の成績は、中学校では81点以上の卒業生が約5割で一番多く、高校では61～80点の卒業生が5割弱で一番多い。一方、海外旅行は7割以上が経験していて低くない。本研究では、分析対象者を「国際理解」と「英語科」の二つに分類して分析を行うことにする。「国際理解」とは、外国語活動に近い国際理解カリキュラムのみを週1コマ経験した卒業生が対象で、「英語科」とは、低学年から英語学習を始めて高学年で部分的な文字指導と小中連携のカリキュラムを経験した卒業生が対象である。<表3>は、その類型の詳細を表したものであるが、「国際理解」には2002年と2003年度の卒業生が、「英語科」には2004年度から2006年度の卒業生が属する。

3. 分析と考察

3-1. 英語学習の側面にみられる影響

まず、「小学校の英語学習が卒業生の英語学習に与えた影響」を尋ねたところ、「英語に親しんだ」、「外国人に会っても物怖じしなくなった」、「英語を聞く力が身についた」、「英語の基礎が身についた」の順に肯定的に評価した。4件法の回答のうち、



注) 数字は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の比率(%)
カイ二乗検定：表中の項目1と4は $p < 0.01$, 2はnot significant, 3は $p < 0.05$

図1：小学校英語学習の回顧的評価(一)

「とてもそう思う」と「まあそう思う」の回答率は、順に83.3%, 68.9%, 64.4%, 45.6%で、情意的な部分への有用感が高い傾向がみられる。4項目とも女子の方が男子より肯定率が高い傾向がある。また、受けたカリキュラムの違いによる影響が表れた項目は、「英語の基礎が身についた」の項目のみで、「国際理解」を受けた卒業生が34.0%、「英語科」を経験した卒業生が58.1%で、その肯定率に24.1%の差がみられる。これは、カリキュラムの特徴の中で、授業時数や文字学習が卒業生の有用感を左右する一つの要因になっていることを表している。

<図1>は、小学校英語学習の否定的評価を尋ねた4項目の肯定率である。すべての項目が6割以下の肯定率ではあるが、全体的にみると男女の差が激しく、女子より男子の方が小学校英語学習に否定的評価をしていることが分かる。

次に、「高校になって小学校でやった英会話が役に立ったか」と尋ねたところ、4件法の回答のうち、「とてもそう思う」と「まあそう思う」の回答率は48.9%で、約半数の卒業生が高校のときにも小学校英語の有用感を感じていた。ただし、男女別の有用感の差異を調べてみると、男子36.8%, 女子57.7%で男子より女子の方が高い傾向がみられる。このような傾向は、小学校英語学習が彼らの英語学習全般に与えた影響を尋ねた自由記述にもみられる。

<表4>は、その自由記述を良い影響と悪い影響に分けて分

表4：小学校英語学習が英語学習全体へ与えた影響(卒業年度別男女差)

		02	03	04	05	06	全体
男	+	17	5	4	5	3	34
	-	7	3	5	1	4	20
女	+	15	22	11	10	13	71
	-	5	11	6	5	4	31

注) +は良い影響, -は悪い影響, 数字は自由記述文の数。
一人が記述した文に良い影響, 悪い影響両方書いてある場合は、記述文ごとにカウントした。

表5：小学校英語学習の回顧的評価

	全体 (90名)	男 (38名)	女 (52名)
文字(アルファベット)学習			
①単語を覚えられるようになった	50.0	36.4	59.6
②英語で聞く・話すことがしやすくなった	64.6	62.5	66.0
③英語の歌詞を読むことが多くなった	36.3	33.3	38.3
歌・ゲーム			
④英語のリズムがわかるようになった	66.7	57.9	73.1
⑤外国人が話すスピードで英語を話そうとした	36.0	43.2	30.8
⑥学校で習った英語の歌を、家で歌ったことがある	64.4	47.4	76.9
外国人との交流			
⑦外国人に会っても、恥ずかしがることがなくなった	68.9	71.1	67.3
⑧分かり合うためには、英語の勉強が必要だと思った	87.8	84.2	90.4
⑨交流した人の国のことを、調べたことがある	31.1	34.2	28.8
⑩人と接するときマナーにも気をつけるようになった	67.8	76.3	61.5
⑪日本の文化を外国人に伝えることがだいじだと思った	80.0	71.1	86.5
⑫日本人と違う行動の理由を考えるようになった	48.9	52.6	46.2
外国人との直接会話			
⑬自分の英語が通じることがうれしかった	87.7	84.2	90.4
⑭外国人が聞きとれるように発音するのは難しかった	93.3	92.1	94.2
⑮新しい表現を覚えて、通じかどうか試してみた	38.9	34.2	42.3
⑯英語で話す内容をもっと考えるようになった	48.9	47.4	50.0
⑰声のトーンやイントネーションを意識して話した	60.0	65.8	55.8

注) 数字は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の比率(%)

類したものである。全体的にみると、女子の方が積極的に小学校英語学習の影響を述べていて、男子より2倍以上良い影響を受けていると考えている。その内容を具体的にみると、以下のように「外国人と直接交流し会話した経験」に関する記述が多い。

- ・「曜日、月を歌で覚えたから楽しく分かりやすかった。実際に外に出て外国人に質問することは良い経験になったし、多様な国の人と触れ合えたのでよかったと思う。」(高3, 女)
- ・「外国の方と接する機会が多かったため、外国の人を異質なものと考えず、もっと身近な人たちと感じられたのはよかったと思います。小学校でならった英語の歌やゲームは今でも覚えているけど、それが直接役に立ったことはありませんでした。」(大学1, 女)
- ・「学校の外で外国人に直接インタビューした経験はめったにできるものではなく、振り返るといい経験ができたと感じる。」(大学2, 女)

以上をみると、小学校英語学習に対する評価は男子より女子の方が高く、小学校の英語カリキュラムが英語学習に対する男女差を生み出している可能性があることがうかがえる。

語学は女の子が得意とよく言われているものの、さらにその

差を拡大する可能性については、注目すべきことである。

それでは、卒業生は小学校英語活動の成果を具体的にどう評価しているだろうか。＜表5＞は卒業生が小学校の時経験した「文字学習、歌・ゲーム、外国人との交流、外国人との直接会話」を振り返って評価した結果である。全体的にどの活動に有用感を感じたかを各項目の肯定率の平均値で順にみると、「外国人との直接会話」が65.76%、「外国人との交流」が64.0%、「歌・ゲーム」が55.7%、「文字学習」が50.3%で、「外国人と直接交流し会話する」活動に有用感が高い。これは前述した小学校英語の良い影響として最も多く取り上げられていた内容と同様で、A小学校の「校外で外国人と直接英会話を体験する」という異文化学習が卒業生に長期的に有用感を与えていると考えられる。一方、どこの小学校にも一般的に導入されている「歌・ゲーム」は、④、⑤、⑥のすべての項目において男女別の有用感の差が10%以上みられる。このことは、授業の内容を考える際にとりわけ考慮されるべき点である。

次に、文字学習の効果に注目すると、①と③のような「単語の暗記」や「英語の読み」への効果より、②の「英語で聞く・話すことがしやすくなった」(64.6%)ということが高く評価されている。すなわち、彼らは文字学習を通して英会話への効果を実感している。このことは、適切な時期での文字学習の導

表6：文字学習の導入時期

	全体 (90名)	国際理解 (47名)	英語科 (43名)
中学校	16.9	30.4	2.3
小学校高学年	38.2	28.3	48.8
英語勉強開始時	44.9	41.3	48.8

注) 数字は比率(%), カイ二乗検定, $p < 0.05$

入が、会話における積極性に影響を与えることを裏付けている。

それでは、文字学習を経験した卒業生は、文字学習の導入時期についてどのように考えているのだろうか。〈表6〉は文字学習の導入時期について尋ねた結果である。

全体的にみると、卒業生の83.1%が小学校から文字学習を始めることが有益であると評価している。彼らが受けたカリキュラムの特性別にみると、その回答の開始時期は分かれる傾向がある。特に注目すべきことは、小学校の時に文字学習を経験した卒業生の97.6%が、小学校からの文字学習の導入を強く望んでいることで、これは、小学校での文字学習に対する有用感が高いことを表している。しかし、彼らが1年から3年間受けた文字学習の内容は、導入初期の部分的な文字学習に過ぎない。例えば、4年生から文字に触れ、5年生で単語を読んだり書いたり、6年生で身近で必要感のある単語やあいさつの文を読んだり書いたりするという程度のものである。

2008年告示「小学校学習指導要領」では、文字指導の扱いについて、「外国語のコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取り扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること(108頁)」と指摘している。小学校英語カリキュラムにおいて、アルファベットの読み書きを適切な時期にどのように導入するかを考えるべきである。

3-2. 外国人との直接交流の影響

次に、卒業生に最も有用感が高い「外国人との直接交流」による異文化学習が、彼らにどのような影響を及ぼしているかを検討する。卒業生の回顧的な評価による外国人との直接交流と会話の効果は、〈表5〉をみるかぎり、「英語学習への動機づけ、コミュニケーションの基礎、発信力、外国人に対する物怖じしない態度」を身につける点で有効である。これは、コミュニケーション一般の基礎になる部分であり、外国語を媒介にして身につけた異文化間コミュニケーション能力だと考えられる。しかし、外国人との直接交流を通して、⑨のような異文化一般へ興味をもたせた効果は、3割程度でそれほど高くない。すなわち、交流した人の国について調べたり、深く考えてみるといった発展的な学習の段階までには至っていない。その理由として

は、彼らが小学校で経験した英語科のカリキュラムの影響が考えられる。A小学校の卒業生が経験した異文化学習は、「校外で外国人と直接英会話を体験する」、「外国人ゲストを招待して触れ合う」、「ALTと仲良くなる」といった活動が主な内容であり、特に多文化理解を意識したものというわけではない。したがって、幅広い異文化学習を促す働きかけについては、とりわけ積極的にはなされたわけではなかったと推測される。外国人との直接交流を通して、新しい表現を試してみたり(⑮)、交流した人の国を調べる(⑨)などの発展的な学習の段階に達していく過程を意図的にカリキュラムの中に導入することが必要である。

それでは、カリキュラム上の異文化学習の位置づけが卒業生の異文化意識にどう影響を与えているのか、異文化間コミュニケーションへの意識傾向を分析してみる。

〈表7〉に示す通り、「異文化への関心度」と関わる項目(①, ④, ⑤)に関しては、国際理解カリキュラムだけを経験した卒業生の肯定率が高い。「異文化意識と英米文化偏重(②, ③)」の項目でも、その傾向が明確に表れている。ここには、国際理解カリキュラムに加えて週2.5時間の文字学習を取り入れた英語科カリキュラムよりも、週1時間の国際理解カリキュラムだけの学習の方が、異文化への関心度が高まると同時に英米文化偏重にならないという傾向が表れている。これはすなわち、カリキュラム上の異文化学習の位置づけが、卒業生の異文化意識の差を生み出す一因になっていることが指摘できる。一方、異文化間コミュニケーション能力と関わる項目(⑦, ⑧, ⑨, ⑩)をみると、卒業生の約80%が場面や状況に注意を払いながら、「相手によってコミュニケーションの仕方を変える(⑦)」ことはできているが、「異文化の人の行動を他人に説明できる(⑨)」は、約20%と極めて低い数値を示した。「異文化背景をもつ人との親しい関係が望ましいと思う(④)」の異文化意識の面では、82.2%の卒業生が肯定的に考えているが、実際の場面になるとなかなか難しいようである。すなわち、コミュニケーション能力は身につけていても、異文化間コミュニケーション能力については課題があることが分かる。

塩澤(2010)は、異文化と英語教育との関連について、「外国語自体を学ぶのみでは、沈黙の意味、ジェスチャーなどの非言語行動の意味、空間の重要性、思考方法の違い、コミュニケーション・スタイル、価値観などの異文化間コミュニケーションに欠くことのできない構成要素は身につかない(14頁)」とし、異文化は意識的に学習するものであることを強調している。2008年3月の「小学校学習指導要領」告示とともに、外国語活動のためにつくられた『英語ノート』には、多文化・多言語を意識した内容が含まれていて、「英米文化偏重」に陥らない「小学校外国語活動」を目指している。さらに、2012年4月から使われる新たな「外国語活動」の教材『Hi, friends!』におい

表7：異文化間コミュニケーション関連項目の肯定率

	全体 (90名)	国際理解 (47名)	英語科 (43名)	男 (38名)	女 (52名)
①いろいろな国の文化に関心	74.4	78.7	69.8	68.4	78.8
②英語以外の外国語も学校で学んだ方がいい	51.1	53.2	48.8	44.7	55.8
③英語以外の外国語を学んだことがある	54.4	66.0	41.9	60.5	50.0
④異文化背景をもつ人との親しい関係が望ましい	82.2	91.5	72.1	84.2	80.8
⑤できれば今まで行ったことのない所へ行ってみたい	87.7	85.1	82.9	89.4	86.6
⑥外国人の友だちは、英語圏の人がいい	57.8	55.3	60.5	73.7	46.2
⑦相手によってコミュニケーションの仕方を変える	79.8	80.4	79.1	81.1	78.8
⑧外国人と英語で何とかコミュニケーションが取れる	62.2	63.8	60.5	55.3	67.3
⑨異文化の人の行動を他人に説明できる	20.5	22.2	18.6	18.4	22.0
⑩会話をするとき、場面や状況に注意を払う	86.7	87.2	86.0	89.5	84.6

注) 数字は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の比率(%), カイ二乗検定：性別において、表中の項目①, ⑤, ⑥, ⑧は, $p < 0.05$, その他の項目は有意差なし。

でも同様の内容が含まれ、デジタル教材では異文化学習内容の更なる充実が図られている。異文化間コミュニケーション能力を身につけるためには、小学校で経験した異文化学習を基礎として、中学校、高校でも継続的に異文化学習を英語と関連づけて考えていく必要がある。

それでは、異文化意識は中学校の英語授業にどのような影響を与えているかを検討する。中学校の英語授業への満足度を尋ねた結果を全体的にみると、「外国の話聞く(82.0%)」、「ALTの授業(76.4%)」、「教科書(68.9%)」、「ゲーム(65.2%)」、「英会話(57.8%)」の順に楽しいと感じている。その中でも「外国の話聞く」の項目は、男子72.9%、女子88.5%で、女子の方が異文化学習関連授業へ高い満足度をみせている。すなわち、小学校英語学習に対する評価が高い女子の場合、中学校の英語授業でも異文化学習を好んでいて、その異文化学習は英語学習への意識を間接的に高める要因になっていることがうかがえる。

次に、彼らが「英語力」をどのように捉えているかを自由記述で尋ねた結果をみると、「幅広いコミュニケーション能力(77記述)」として捉えているのが多数の意見である。ちなみに、「正確な英語を使える力(17記述)」として捉えている意見は少ない。その具体的な内容は以下の通りである。

- ・ 英語はコミュニケーションの手段だと思うので、文法や長文、読解よりも自分の考えが言えて、相手の言っていることが理解できることが一番大切だと思います。だから、いくら学校のテストができて、実際に外国人と話せなかったら、全く意味がないと思います。
- ・ 怖がらずにフレンドリーに外国人に対して話せること。日本では「英語力=文法力」であるが、私は「英語力=話すこと」だと思う。
- ・ コミュニケーション能力。最低限の単語力、文法力+伝えようとする気持ちが大切。慣れと親しみ感が大切。

これはスキル中心の英会話能力より、異文化理解も含む幅広いコミュニケーション能力を英語力として捉えている人が多く、言語的な側面の英語学習だけでは「英語力」は身につかないことを表している。さらに、卒業生に「外国人と話すとき必要な能力」について尋ねた結果によれば、①「物怖じしない態度」、②「非言語的な要素の大切さ」、③「伝えたい内容を整理」、④「単語や文法の知識、正しい発音」の順に、言語的な要因より、非言語的ならびに情意的な要因を重要視している。ここからは、卒業生の多くが非言語的な表現力を異文化間コミュニケーションの基礎として身につけていることが分かる。

最後に、A小学校英語カリキュラムを受けた卒業生が考える望ましい小学校英語カリキュラムのあり方を「小学校英語学習への意識」を尋ねた項目で整理すると、「小学校の英語カリキュラムは、小学校低学年から(53.9%)、毎日20分程度行う(55.1%)ことにする。小学校の英語教育は、外国人と接する経験(66.5%)、英語への興味(66.5%)を中心に行い、文字学習は小学校(83.1%)から取り入れることにする。学校での英語教育は、実際外国人と会話すること(75.0%)を中心に行うことが望ましい。」とまとめられる。ただ、「国際理解」と「英語科」カリキュラムの間の効果の違いは、授業時数の違いに比べて極めて小さく、授業時数の増加や文字学習の導入が異文化への関心度を偏ったものにする可能性を考えると、カリキュラムの中で異文化学習を基礎として各要素のバランスをどう取るかを考慮すべきであろう。

4. 結論

以上の分析結果は、研究開発学校一校のみの卒業生を対象にした事例研究であり、回収率も19.4%と決して高くないため、この結果を値に一般化することは難しいけれども、小学校英語導入初期の卒業生に第2次追跡調査を実施することで、長期的

なカリキュラム効果の一部を見出すことができた。その一つは、小学校英語カリキュラムは、異文化間コミュニケーション能力の基礎になる非言語的な部分へ一定の影響を与えていることである。一方、言語的な部分では「聞き取り」に効果がみられ、適切な時期の文字学習の導入が「会話」と関わる基礎的部分に影響を与えているが、文字学習の導入時期と内容については今後検討する必要がある。また、これらの評価には男女差がみられ、女子の方が積極的に評価している傾向がみられた。特に、ゲームや遊び中心の単純な活動や内容に対する男女差は、小学校英語カリキュラムの教育内容と活動の精選を考える際に、考慮すべき部分であると考えられる。

次は、カリキュラムにおける異文化学習の位置づけ、つまり単元構成が彼らの異文化意識の傾向に影響を与えていることである。特に「外国人との直接交流」「会話する」などといった体験は、最も長期的に小学校英語カリキュラムの良い影響として認識されている。「中身と相手があるコミュニケーション体験」を中心とする異文化学習が、中学校英語との連続性を確保する要因になると考えられる。その際、広い意味での異文化間コミュニケーション能力を身につけさせるためには、異文化学習を深める過程をカリキュラムの中に位置づける必要がある。すなわち、異文化学習の要素を中学校の英語学習にも単元化しカリキュラムの中に位置づけて持続させることが必要である。そしてその際、次の2点に留意することが大切である。第一は、体験中心の異文化学習をベースにすることである。第二

は、非言語的な要素を含めた異文化間コミュニケーション能力が考えられる必要がある。これらの異文化間コミュニケーション能力の基礎になる要素を目標化していくことが、小中連携の一つの鍵になると考えられる。

<注>

- (1) A小学校の4回にわたる研究開発学校の研究主題は以下の通りである。第1回目(96～98)は、「地域社会に根ざした小学校英語学習－週あたり複数回の英語活動を通して－」、第2回目(2000～2002)は、「未来へつなぐ小学校英語－実践的なコミュニケーション能力の基礎を養う－」、第3回目(2003～2005)は、「未来に生きる英語科学習－小・中の連携を通じた実践的なコミュニケーション能力を高める－」、第4回目(2006～2008)は、「世界をひらく英語科学習－小・中連携を通して実践的なコミュニケーション能力を高める－」である。

<引用文献>

- 金 瑠淑(2004)「小学校英会話カリキュラムが卒業生の情意的側面に及ぼす影響－‘異文化併用型’と‘英語重視型’の比較事例分析－」、『カリキュラム研究』75～89頁、日本カリキュラム学会編、第13号
- 金 瑠淑(2009)「小学校英語カリキュラムの評価」、田中統治、根津朋実編著『カリキュラム評価入門』、51～74頁、勁草書房
- 塩澤正、吉川寛、石川有香編著(2010)『英語教育と文化－異文化間コミュニケーション能力の育成』、大修館書店
- 白畑知彦(2007)「言語習得からみた小中連携」『小学校英語と中学校英語を結ぶ』松川禮子、大下邦幸編著、64～74頁、高陵社書店
- 松川禮子(1997)『小学校に英語がやってきた!』102～136頁、アブリコット
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領』、東京書籍